

戸隠神社

あをがき
青垣
平成29年[秋冬号]
戸隠神社発行
〒381-4101
長野県長野市戸隠3506
026-254-2001
http://togakushi-jinja.jp

戸隠 去来抄 第七回

文人と戸隠 小林一茶(最終回)

一、昨今の俳句ブーム

世の中に俳句ブームが漸進してきたような気がする。

例を一つ。現在SBCテレビ(TBS系)で、木曜日午後七時放映中のプレイバト。有名タレントが

「お題」に基づいて作った俳句を、夏井先生が巧妙・洒脱、辛辣に批評。そして見事な作品に変身させてしまう。

この番組が、老若男女にたいへん人気ありというのである。特に子供も楽しみにしているという。

もう一つ。八月十九日には愛媛県松山市で



江戸時代の戸隠宝光院(『善光寺道名所図会』より)

第二十回「俳句甲子園」の全国大会が開催された。これは、高校生が五人一チームで俳句の出来栄や鑑賞力を競いあうもので、過去最多の二十五都道府県から四十チームが出場したという。長野県からは、千曲市の屋代高校が初出場した。

二、小林一茶への焦点化

小林一茶が、その生涯を閉じたのは文政十(一八二七)年。今年は一茶没後百九十年という大きな区切りとなる。この年を見定めたかどうかは明確でないが、この十月には、映画「一茶」(リリー・フランキーさん主演)の公開が予定されている。

これらに沿うように、一茶生誕の地、長野県上水内郡信濃町では、新しく事業体を組織し、映画のロケ地も含めた一茶ゆかりの場所を紹介するガイドマップ作りを始めた。更に案内ボランティアの育成や俳句作りのための冊子を刊行した。

このように俳句ブームが追い風となつて、今後も小林一茶が巷の話題の一つとして取り上げられていくことが予想される。

三、小林一茶と戸隠

これまで本紙の第二号・第六号により、小林一茶が戸隠について詠んだ句を十二句紹介させていただいた。

- 【一】霞む日も 雪の上なる 住居哉
- 【二】水風呂へ 流し込だる 清水哉
- 【三】一ツ蚊の だまってしくりく 哉
- 【四】初梨の 天から降た 社壇哉
- 【五】権現や どの御耳で 時鳥
- 【六】鬼の寝た 穴よ朝から 秋の暮
- 【七】鶯の 幾世顔也 おく信濃

鶯が何世代も経てきたような顔をして、趣深く上手に鳴いているなあ、という意味。

- 【八】涼しさや 青い釣鐘 赤い花
- 【九】釣鐘の 青いばかりも 涼しさよ



宝光院の鐘楼(拡大)

↑ 鐘楼

- 【十】戸隠の 屋根から落ちる 清水哉
- 【十一】百里来た 梨のころげる 社哉
- 【十二】秋風の ふきもへらす 比丘尼石

秋風がどんなに強く吹いても、九頭龍権現の厳しい禁制がかかっているため、石に変わったそのままでの姿で鎮まっている比丘尼(女性)の修験者)の石よ。

本稿では残り三句と、飯綱山を詠んだ三句を紹介させていただく。

最終回に当たり総集編として、詠まれた句と関わりのある場所を、推定も含め、戸隠越水在住の里野町子氏の作成したイラストマップに示すことにする。このイラストは、ハンドマップとして手軽に活用していただきたい。そして、一茶が詠んだ当時の情景に皆様方の思いを重ねて下さい。そういうことが、歴史に向き合う醍醐味のひとつになるかもしれません。

(4面に続く)

*あをがき(青垣)とは切り立った険しい山が垣根のように連なる様子。当社では祝詞の中で「青垣成す戸隠山の麓に鎮まり坐す戸隠神社」と用います。



中社から奥社へ続く古道脇の比丘尼石

【十三】耳一つ 御かし給えや 時鳥

文政元（一八一八）年、一茶五十六歳の作。自分もだんだん年をとり、耳が不自由になってきた。そこで、戸隠の九頭龍権現の九対の耳のうち、どうか一つを貸してもらったならば、時鳥の声もよく聞こえるのという意味。ちなみに【五】の句については、次のように推定した。

この権現は、戸隠の地主の神である九頭龍権現をいう。詠まれたのは、文化八（一八一）年で、この年は深川八幡宮で戸隠山顕光寺（現在の戸隠神社）の御開帳が行われている。この御開帳には、文化元（一八〇四）年に新調された四基の神輿の一基に九頭龍権現の尊像を載せ江戸まで出向いたと思われる。とすると、当時江戸にいた一茶が、深川でその尊像を拝し、一句詠んだのである。【十三】の句はこの内容に通ずる気がする。

【十四】けぶり見へ 戸隠見へて 肌寒き
文化四（一八〇七）年、一茶四十五歳の作。秋の霽にかすむ景色をみて、肌寒さを感じるなあとという意味。

【十五】いづるぞよ 戸隠山の 御夕立
文化十（一八一三）年、一茶五十一歳の作。西から雷鳴と共にやってくる夕立と、戸隠山の九頭龍権現がもたらすという雨とをかけているのだろうか。

【十四】と共に、戸隠山が見える地元柏原で詠んだ句であろうか。さてこの句にみられる「いづる」という表現であるが、津村信夫の著書『戸隠の絵本』（昭和十五年発行）の「十五 夕景色」の一節に次のような記述がある。

子供は一人減り二人減りして、遊びの輪はだいぶん小さくなつてゐた。小さな子供の中にまじつて十六七の背の高い少女がゐる、それが夕闇に白い頬をくつきりと浮き出させてゐる。

老人はと見ると、子を負つて相變らず行つたり来たりしてゐる、そして一寸立ちどまると、暮れて行く戸隠山の方を眺めてゐる。「そうら、な、戸隠様が夕焼けてござる」

老人はそんな事を呟く。一寸無邪氣な表情である。「あしたは天気になーれ」子供達の輪がさう云つて一しきり囃し立てる。すると、まるでそれに調子を合わせるやうに、とん

とんと背の子供を敲き乍ら、眠かせるつもりであらう、老人は軽く足拍子をとりだした。

語句の種類や働きはまったく別であるが、「いづる」とさらに「戸隠」と「夕」との組み合わせに、偶然かもしれないが江戸・明治・大正・昭和という約百三十年の時空を越えての響きに興味がひきつけられる思いがする。

参考までに、当時は戸隠神領であった飯綱（縄）山を詠んだ三句をつけ加えます。

- (一) 涼しさや 飯を掘出す いづな山
 - (二) 神風や 飯を掘出す 秋の山
 - (三) 粟飯は 爰に有りとや 女郎花
- いずれも文政元（一八一八）年、一茶五十六歳の句。この三句に共通するキーワードは「飯」。なぜ飯綱（縄）山に「飯」なのか。

この「飯」を解き明かす一つの資料は、年代はやや下るが天保十四（一八四三）年に、美濃（岐阜県）の人、豊田利忠が著わした『善光寺道名所図会』という本。その「巻之三」に「飯」に関する記述がみられる。

著者は「飯縄か岳」に登り、山頂で「飯砂」を手に取る。それはまるで麦飯のようで、また粟飯のようにもみえる。食べてみると和らかで、香気とか風味はない。たくさん食べても支障はない。いかにも不思議な感じがする。

著者はこの体験をもとに、世間一般では「飯縄」と書かれているが、実は「飯砂」ではないのかと、神主である

仁科氏に問う。仁科氏は、まことにそうかもしれない、と言ったが、それに続けての応答はなかった、というのである。

著者が実感したように「飯縄」または「飯綱」の語源は「飯砂」であったかもしれない。今後の解明課題の一つだろう。

本稿を終えるにあたり、あらためて小林一茶という俳人の偉大さに触れることができたような気がする。さらに、人と人、そして地域との出会いの「縁」を感じる。

この企画はあくまで入り口、これから本格的な動き、大きなうねりのような文化活動が展開できればと思っている。（了）

宮澤豊徳
戸隠神社講社聚長

平成三十年柱松神事齋行

日時 平成三十年七月八日（日）
（七月七日 前夜祭）
場所 中社広庭



柱松とは大きな松明のこと。三本の柱松に火を入れ、その燃え方により五穀の豊凶や景気などを占います。併せて参拝の皆様が願いが込められた祈願串が焚き清められ、万福の招来を祈念致します。